

一橋大学大学院 社会学研究科 GP 訪問 報告

2009年3月11日 関西学院大学大学院社会学研究科 GP 事務室

■ 1. 目的とスケジュール ■

以下のスケジュールで、一橋大学大学院社会学研究科 GP を訪問しました。

○ 出張目的：

社会学研究科大学院 GP キャリアデザイン推進室等訪問、協議

○ 出張人員：

白石、柴田（以上 GP 事務室）、山北、谷村、稲津（以上同行）

○ 目的詳細：

主たる目的は、先方 GP 見学である。訪問先社会学研究科 GP は 2007 年採択であり、こちらの 1 年先を行っている。プログラム担当教授、特任講師らにプログラム遂行上の工夫やご苦労などの経験談を伺い、当方の GP 運営に生かしていこうというねらいがある。

第二の目的は、研究会などを通じた院生どうしの交流の可能性をさぐることである。このため来年度以降の共同研究にコミットする院生・研究員、および外部への発信(広報)にコミットしている RA が同行する。双方の大学院生・研究員が会合する場（研究交流会）をもつ。今回の訪問がこれからの関東-関西間の若手社会学者どうしのネットワーキングの端緒になることが期待できる。

○ スケジュール：

=3月4日(水)=

- ・午後、白石 東京へ移動、前泊。

=3月5日(木)=

- ・午前中、山北、谷村、稲津、柴田の4名、東京へ移動。

11:00-12:00

- ・一橋大学大学院社会学研究科 GP 説明（児玉谷史朗教授、佐藤裕特任講師）

@一橋大学国立東キャンパス マーキュリータワー5階 3509室... 白石

12:10-13:30

- ・ランチョンセミナー（落合一泰教授=GP プログラムリーダー）... 白石

15:00-17:00

・院生どうしの研究交流会 ... 山北、谷村、稲津、柴田、白石

@一橋大学国立西キャンパス 108 教室

=3月6日(金)=

08:30-10:00

・朝食&研究打ち合わせ ... 山北、谷村、稲津、柴田、白石

○ 全員の宿泊先:

ホテルメッツ国分寺

■ 2. GP キャリアデザイン推進室訪問 ■

一橋大学大学院社会学研究科 GP キャリアデザイン推進室は、当方の GP 事務室にあたり、7名の RA の方の机が配置され、常駐されています。GP ご担当の児玉谷教授、佐藤講師に、先方 GP プログラム「キャリアデザインの場合としての大学院 —入口・中身・出口の一貫教育」(2007-2009 年度)の概要と実施状況をご説明いただき、資料もいただきました。先方の社会学研究科は狭義の社会学に限らず、文学、歴史学、政治学、人類学などの研究者をも抱えたいわば「social sciences」の研究科であり、院生も 100 人以上を擁する大所帯です(1990 年代に新専攻増設、2000 年以降大学院化による定員枠の大幅拡大)。したがって当方とはいろいろと事情のちがいもあります。

○ 独自の取り組み

しかし、英語での発信力養成(「発信英語力強化部門」)、GP プログラムによるワークショップ、国際学会での発表など院生への各種競争的資金の助成(「企画実践力強化部門」)など、取り組みに似通った点もあります。こちらの助成の取り組みなど紹介したのですが、先方からは、「共同研究の企画と運営」への助成が独自の取り組みとしてよい実践例(GP!) だと評価されました。

先方の GP で独自だと思われたのは「教育技能強化部門」での Teaching Fellow Diploma 制です。要約すれば大学教育実習をカリキュラム化したもので、講義見学、レポート作成、講義実習、事後講習などを経て TF ディプロマを取得するというもの。このディプロマは先方 GP 考案のローカルなものです。おそらく東京はこちらに比べて非常勤ポストの競争が熾烈でしょうから、院生や OD の教育歴をサポートしようという意図があるようです。

ほかにも、大学院を修了し就職した OB、OG による講演(ないしインタビューの公表)、学振特別研究員による申請書の書き方講習、博士号取得者などの経験に基づくフィールド調査から論文執筆までの過程の講演、ポスドク研究員志望者のための研究計画書作成講座をはじめとした数々の「キャリアデザイン講習会」の開催など、総じて、大学院生の実際的なニーズに対応しようという真摯な姿勢を感じました。

○ 同じ「悩みどころ」

似たような「悩み」確認の場面もありました。先方から伺ったなかでとくに印象深かったのは、まずは博士後期で留年している(D4-D6)の在籍者は多くが論文執筆に集中するために休学し、したがってプログラム内の各種助成対象から外れてしまうが、実質的にはかれらこそ国際学会での発表など output できる/したいニーズをかかえているのだ、というジレンマ。似たような状況は他の人社系の研究科の大学院 GP にもあるはずですが、これはまさに、当方のかかえている「単位取得退学をしたのちの研究員が GP リソースにアクセス困難」という問題と同じです。これまで関学独自の問題と捉えられていたものは、もしかしたらこの人社系大学院 GP も抱えているあるていど共通の問題かもしれません。

また、GP プログラムの実施する各種の開催企画や助成企画などをいかにその対象たる当の大学院生に知ってもらい、かかわってもらうか。こうした研究科内コミュニケーションの面も、双方とも課題としているところであるようです。もちろん、先方は専攻の異なる 100 人を超える院生をかかえているという規模と多様性の面で生じる不利な点も出てくると思います。しかし、大学院生 30 人、単位取得後の研究員をあわせても 40 人ほどの当方であっても、忙しい院生とのコミュニケーションは E-mail などに頼らざるを得ない場面が多くあり、GP 事務室での対面的やり取りで各企画などがすすんでゆくという理想的なかんじにはまだ程遠いといわざるをえません。なかなか難しいものです…。

当方は GP 事務室オープン後まだ 3 ヶ月ほど。今回、おなじ社会学研究科 GP の 1 年先輩にあたる先方のキャリアデザイン推進室を訪問させていただき、企画など似通った点、工夫されている点、同じ悩みどころなど、たいへん参考になりました。児玉谷先生、佐藤先生、お忙しい中ありがとうございます。これからも機会あるごとに情報交換などをさせていただきたいと思います。先方 GP プログラムの詳細をまとめた冊子資料をいただきましたので、閲覧希望の方は GP 事務室までお越しください。

■ 3. 院生・研究員どうしの研究交流会 ■

研究交流会は、あえてほぼノープログラム、自由に議論というスタイルをとりましたので、はじまりの 30 分ほどはどうなるやらと内心思っていました。名刺交換、各自の研究紹介と抜刷などの交換からはじめ、徐々にお互いの研究関心について議論、関東・関西のローカルな研究会・学会情報交換、各自のもつ研究ネットワークの話まで、かなり有意義な会合がもてたと思います。お忙しいなか、一橋側からは複数のゼミから大学院生の方々に参加していただきました。

集まったメンバーが一橋側・関学側双方ともフィールドワークによる質的・量的調査に従事していることもあり、質問票調査、参与観察、聞き取りなどの方法についての議論や情報交換が活発におこなわれました。そこから議論の流れはしだいに、調査対象社会における調査者の立場性や、調査者と対象者との関係性などの話題に向かいました。現在社会学や人類学のフィールドワークをおこなったことのある者の多くが経験的に向き合わざるを得ないこの難題は、大げさに言うならば「社会学者の実存」にかかわる問題と言えるかもしれません。各自の具体的な調査経験をまじえながらの話はどれも固有の重みを有しており、「いま、なぜわれわれはフィールドワークをするのか？」をめぐる真剣な

議論になっていたと思います。

さらにその後、町村ゼミ御用達の居酒屋での懇親会まであり、かなり intimate かつ濃密なかんじで研究交流をはかることができました。具体的に来年度以降の研究会・学会を通じた交流のアイデアも複数出ていました。一橋側、関学側の院生・研究員とも「刺激になったし、これからの関東・関西の院生どうし、若手どうしのネットワーキングにつながりそうだ」との感触を得てくれたようで、ひとまず成功といえそうです。

以下に、関学側の参加者の院生・研究員の方々によるレポートを掲載します。

【山北】

一橋大学の院生の研究計画、とくに大半の院生がなんらかの国際発表を経験していることに大変刺激を受けた。着実に研究が蓄積されているという印象を受けた。また、質的な調査を行う院生同士ということもあり、お互いのフィールド経験、現場との関わり方、立場性などの活発な意見交換が行われた。

この交流会を契機に、今後ストリート班(共同研究「東アジアのストリートの現在」)は、来年度中旬、学会に部会を企画し、その際に可能であれば、一橋の院生も報告者として入っていただく(日本都市社会学会が候補)ことを検討していきたい。また、「ストリートと社会運動」(9月開催予定)、「ストリートとエスニシティ」(6月開催)、「ストリートと記憶」(未定)、といったテーマで一橋の院生を招聘し、研究会を関西で開くことを提案した。また、関東での研究会の情報を適宜送ってもらい、関学からも参加するなど、具体的な形で今後を展望することができ、たいへん有意義な時間をもつことができた。

【谷村】

院生との交流の中で、多くのことを知ることができた。たとえば、大学院総合教育研究棟・マーキュリータワーを少し案内していただいたが、その研究環境は実に羨ましいものであった(研究棟には土日含め24時間出入り自由。また、全員分の席が確保されているわけではなく、交代制とのことであるが、院生には研究室も与えられている)。

しかし、問題点も存在するようである。たとえば、一橋の社会学研究科は多数の院生を抱えており、ゼミの人数も多いところでは20名を数えるという。そうであるがゆえに、各ゼミが「タコソボ化」しがちであり、同じ研究科であるにもかかわらず、他ゼミの院生がどのような研究をしているのかわからない院生もいるらしい。実際、この交流会を通じて、一橋大学の院生同士がお互いの研究を初めて知るといった場面が見られた。関学で例年行なわれている研究成果発表会の意義を改めて感じた次第である。一方で、山北氏も指摘しているが、院生のうちに国際学会での発表を済ませている点は大いに刺激になるとともに、なぜ関学でそれができないのか?ということも考えさせられた。

このように「他校」と触れ合うことで、自身を含めて様々なことを改めて捉えなおす契機が作られた。このような交流を続けることは、双方の院生の研究活動を活発化する効果が期待できると考える。今後も機会があれば、是非交流会の開催を検討していただきたい。

【稲津】

今回の交流中、思い出していたのは、なぜか昨年報告させていただいたある学会での報告前後の名

刺交換の場であった。発表前後に他大学の方にお声かけ（させて）頂いても、その場限りの名刺交換で終わってしまい、じっくりと研究についてお互いに語りあう機会が、その後持ちにくかったのが、個人的に非常に悔やまれていた。

こうした中、半日ほどかけ、一橋大の院生の方々とじっくりと話合えた時間は、お互いの顔がよくみえる、非常に充実したものであった。たとえば、ある院生の方が、映像資料を、〈調査のため〉に用いるのではなく、被調査者の方へ〈調査結果を還元するため〉の手法として用いていると仰っていたことは、たいへん興味深かった。映像を駆使した社会調査の方法について考えていこうとするストリート班に所属する中で、私はとにかく〈何か映像をとらねばならない〉という強迫観念に駆られ、映像それ自体が〈何のための映像〉かということを忘れてしまっていただけに、目が開かれる思いであった。

谷村氏が述べているように、他大学の方々との刺激的な出会いを通じて得られたものは、こうした個人的なもの以外にも様々あった。また、山北氏が述べるように、今後の交流の在り方、ひいては、GPプログラムの展開について光明が見えてきたことも、たいへん幸いであった。今後も大学間交流を通じて、お互いの知的刺激を高めあえる関係を引き続き築いていけたらと願っている。



研究交流会でお互いの研究関心や研究環境について議論する

今回の研究交流会は、こちらの突然の申し出に、一橋大学大学院社会学研究科の相川さん、岩館さん、森さんが応えてアレンジして下さったものです。どうもありがとうございました。

研究交流会参加者：

相川陽一、森明香、根本雅也、岩館豊、松尾奈々（以上一橋大学大学院社会学研究科博士課程、敬称略）、山北輝裕、谷村要、稲津秀樹（以上関西学院大学大学院社会学研究科博士課程/大学院研究員、敬称略）、佐藤裕講師（一橋大学大学院社会学研究科 GP キャリアデザイン推進室）、柴田友妃、白石壮一郎（以上関西学院大学大学院社会学研究科 GP 事務室）